

長畝ふるさと通信

【2016年10月号】

■ 28年産米をダイジェストで振り返って

＜4月＞熊本地震発生、佐渡でも暴風被害、育苗ハウス2棟損壊



4月17日、3回目の種まき直後、佐渡に暴風が吹き荒れ、育苗ハウス2棟が損壊しました。ハウスに出したばかりの苗はビニールの破損で温度が保てず生育遅れが心配されましたが、何とか田植えには間に合いました。早朝のハウスビニールの張替え作業には20人を動員し、風が吹かないことを祈りながら力を合わせて無事、張り終えることができました。熊本の被災地に比べれば全然たいしたことはありません。

最近ニュースで見た熊本城の修復規模には改めて驚きました。

＜5月～6月＞順調に田植え、ツバメのヒナが続々と誕生、野生下のトキも・・・

5月6日から順調に田植え、我が家の納屋の常連客であるツバメも次々とヒナが誕生しました。また、42年ぶりに野性下のトキのペアからヒナが巣立つなど新しい命の誕生がうれしい時期でした。



＜7月＞大阪商談会で・・・

7月に大阪で行われたコメ商談会では次々と新しいブランド米が出展し、ゆるキャラやキャンペーンガールまで登場するなど「ブランド米戦国時代」に突入した感がありました。新潟の新ブランド米「新之助」は消費者から支持されるのでしょうか？



<8月>観測史上最も暑い夏を迎えて…

連日30度を超える猛暑日が続きました(本土に比べれば快適みたいですが)。炎天下での草刈りや防除は体に堪えませんが、「夏が暑いほど豊作」という言い伝えが元気を与えてくれました。出穂も例年より3~5日早まり、収穫期も例年より早まる予感でしたが…



<9月~10月>終わりよければすべてよし!



秋雨に思うように収穫作業が進まなかったものの、終わってみれば主食米はオール「1等米」でした。JA佐渡管内全体では1等米比率が残念ながら80%そこそこだったそうで、夏の猛暑と秋の刈遅れが原因だとか。「1年1作」のコメはやはり気象条件や思わぬ自然災害での影響を大きく受けるということでしょうか。ムズカシイ

■ 緊急レポート おけさ柿

佐渡ではコメに次ぐ生産量を誇る「おけさ柿」。生産者の高齢化で生産面積は減少の一途をたどっています。特に近年は春先の「霜害」によって収穫量が大きく左右され、耕作放棄する生産者が増えてきており、佐渡第二の特産品としての地位が揺らいできています。そんな苦しい状況の中、JA佐渡の「おけさ柿中央選果場」をレポートしてきました(コメのネタが尽きたので…)

中央選果場はピーク時には1日1800コンテナを集荷します。生産者は冷たい雨の日でも収穫作業を続けます。収穫した柿は個人単位で「1級品(正品)、2級品、ハネ(出荷対象外)」に選別され、選果場へ出荷します。集荷した柿はコンテナごと「脱渋」(おけさ柿は渋柿なのでそのままでは食べられず、ガスまたはアルコールで渋抜きをします)し、その後、選果、箱詰め、出荷されていくわけです。



選果センサーは柿を前後左右、真上の5方向からスキャンし、キズなどが判別され大きさを計量し11の規格に選別していきます。1コンテナにはおよそ120個の柿が入っていますから、1800コンテナなら216,000個の柿が1日で選果されることとなりますね。



11段階に選果された柿はそれぞれのレーンにオートメーションで仕分けられ、規格別に箱詰めされます。それでも最終工程では人間様の目でチェックし、一つ一つ丁寧に手詰めています。ここでも残念ながら「昔は若くて美人だった人」にしかお目にかかれませんでした。



中央選果場の年間取扱量は800～1000トン。約50,000コンテナを集荷します。おけさ柿の主な出荷先は北海道30%、京浜40%、新潟県内30%ということで、西日本への出荷はほとんどありません。なぜなら、奈良・和歌山といった競合産地があるからです。柿もお米と同様、消費量がどんどん落ち込んでいます。最近では「生食」よりも半生状態の「アンポ柿」の需要が伸びてはいますが、全体的には減少方向です。食の多様化はニッポンの伝統産物を蝕んでいるように思えます。ハロウィーンとかいう欧米の(起源はケルト人の大晦日10月31日のお祭りだそうです)バカ騒ぎにニッポンの若者たちが便乗する光景が目にも余るおじさん世代としては忸怩(じくじ)たる思いです。黄金色の田んぼや真っ赤に熟んだ柿園の風景を大事にしたい!・・・ということで、みなさん、もっともっとコメや柿を食べましょう。緊急レポートでした。

■ おけさ柿のご注文はJA佐渡のホームページをご覧ください。

